



草取り日和

川端 富起子*宮城

唐突に死のこと話す老い母と過ごす日曜、草取り日和

この春も実家の畑に現れる小さき母の鮮やかな赤

雷いかずちを怖がっていた遠き日の祖母を思いついて雷を聞く

雷鳴のとどろく暗い部屋の間で震える祖母の居るような昼

ゼレンスキーの訴え聞きて被災時の南三陸町長おもう

道場 皿

鬼 武 孝 夫 埼玉

三世代集ひ寿ぐ妻八十路 刀自の労苦に感謝の声々

こよなくも和食を好む妻のため「道場皿」座卓に並ぶ

四度もの大手術に克ち快復せる妻は点字の奉仕に励む

これからは一日一日健やかに暮らす「健幸」噛み締め行かむ

上映の近づく「プラン75」 先づ読み直す「檜山節考」

声の手ざはり

印 出 美由紀 神奈川

触れられぬ場所に置かれた石のごとあなたの声のほい手ざはり

夜半覚めて三倍速のメリーゴーラウンドの芯にゐるがに眩む

百合の花が塞ぎてをるらむか三半規管あたりの溝を

相州の丘さかをわたりゆく風のひすいの色の半白さうり

くわくわと呼び合ふ若きからすらのまなこが捉ふ非武装の吾あを

光る 画面

荒川 ゆみ子 東京

地に向けてワンタッチ傘開くとき何かを撃つてしまった気がする

よくずれる玄関マットを直すのはなんとといふ名の家事なのだらう

水上 比呂美選

「あすなる集」特選

元気であれば

青野 多都留 北海道

赤ちやんの小指に形も色も似て初めて間引いた可愛い人參

ねぢくれる胡瓜一本夏風になにくそ顔で凶太くふとる

ひと夏の命のかぎりキリギリス鳴けり草より青き身ふるはせ

咲き終へし花々すべて還りゆく夏の盛りの地の火照りに

血圧も脈拍数も体温もどうでもいいよ元気であれば

海胆がひしめく

中居 久 子*岩手

海胆漁の出漁決まる午前四時過疎なる浜に活気の満つる

出漁の旗を合図にエンジンの爆音ひびく朝のしじまに

海胆漁のむき身作業の準備終え皮算用しつつ帰港を待ちぬ

岬を回りごまつぶほどに見える舟戻るペースが早いぞ今日は

漁場から舟が次々戻り来て万丈籠に海胆がひしめく

たうもろこし奇麗に食べられる人になりたかつたな五歳のころは
〔肺水腫 犬〕とググると余命まで光る画面が私に告げた

晩年の父とおんなじ背中だとホーリー撫でてわが手が思ふ

原賀 瓊子選

三者 面談

清水 佑太郎*東京

休日が減れば減るほど増えるもの口内炎と睡眠負債

AよりもBが優れているという論法からして好きじゃないので
堂々と持論を言うのは良いですが何言ってるのか分からないです
高一の夏の三者面談は楽しい時間 夢を語れる

将来はどんな仕事に就きたいの? ざりざり聞こえた「アナウンサーです」

寢息

富永 恵美子*東京

杉並の区長を変えたこの一票あじさいほどの美しさなれ

ほたる祭りの蛍はほたるの生きられぬ川に放たれ死んでいったよ
この夏はカラスが威嚇してこないカラスに出したき暑中お見舞い
文庫本の定位置がある日常のポディーバッグの速藤周作
カーテンの襞の秩序にそっくりな君の寢息に朝がちかづく

夜の川

前中 映東京

いくたびも翼は水に触れながら川鵜が川を離れてゆきぬ

柴犬のリードに脚をとられたる異国の人の「Upps」の声

その船のかたちは見えず夜の川を過ぎゆく右舷灯左舷灯

若き日のプーチン氏が沼で溺れてゐます。あなたは彼を救助しますか。

おのが身を空に放擲したるのちつばめはついと風に乗りたり

バナライアイス

栗三 誌 野*富山

やり直し叶う社会であるように願いを持ちて見る朝乃山

平凡の象徴だったバナライアイス大人になりて美味しく思う

水泳は苦手だけれど海を恋う遠い昔の生の源

夏という季節のもてる悲しみを現している打ち上げ花火

あやかりたいぐらいの力で伸びてくるとても丈夫な庭の雑草

初ほたる

内藤 丈子 福井

千度超す炎より生れ涼やかな音を奏でをりガラス風鈴

真砂なす星のひとつや初ほたる若狭の夜に生まれ飛びたつ

夏の陽にゑんどうの茨の透きとほり母とかぞふるみどりご七つ

義仲のなみだか沙羅の花ぬらし木ノ芽峠に雨ふりやまず

若狭より(京は遠ても十三里)海のめぐみは京へはこぼる

タラガ峠

大沢 律子 岐阜

ウツボグサ、ドクダミ千せり今年また煎じぐすりを待つ妹よ

梅雨時の鬱はじつとりエプロンの化繊の紐が首に纏はる

使ひ勝手のよき鎌研ぎていざ刈らむ梅雨の晴れ間の笹原に入る

初夏のタラガ峠を越えたきが蛭、蟬、蝮の縄張りならむ

水みちの変はりて遂に水のなき池となりたり あめんぼ何処へ

大野 英子選

午後の静けさ

橋本 武則*大阪

水流は濁りておれど滔々と豊饒告ぐるごとく梅雨去る

梅雨明けの真昼間蒸して四十度フエーン現象をニユースは伝う雲、夏の気配をみせて夏至の午後梅雨の晴間の空変り来ぬ

枇杷むけば種艶やかにまろび出て面白きかな貴種のごとしも凌霄に潮の香強き蝶来たる港に近き午後の静けさ

蟬の抜け殻

笹倉悦子 兵庫

お墓にて車のエンジンかけたまま心せはしく墓参する人

この夏はひまはり植ゑんウクライナに早く平穩が戻りますやう信号が青に変はればからす一羽低空飛行で過ぎて行きたり

すれ違ふ男の児がにつこり手を振りて我も笑顔で手を振りかへすしつかりとグラジオラスの花いだく蟬の抜け殻顔をうづめて

鯖のみぞれ煮

石田信夫*鳥取

寅さんのリリーがそこにいるような凌霄花路地に笑えり

寺の砂利しやりしやり踏んで墓参り 時がゆつくりあと戻りする蜚蜚精霊のごと入り来たり生家跡地のなでしこ咲けば

城下町若桜をめぐる水路澄み梅花藻の花梅雨空に映ゆキッチンの抽斗奥の母のメモ見つけて作る鯖のみぞれ煮

釣銭の音

岸下澄江*鳥取

サラリーマン川柳読みつつにやにやし夫はとうとう声あげ笑う

「これからはおまけおまけ」と七十五の夫は近頃ご機嫌よろしパンジー散り牡丹散り終え紫陽花は待つてましたと両手を上げる

ドラッグ・ストアのシニア割引にわくわくしメモを片手にひととき過す自販機の釣銭の音聞いたのにコーヒー缶だけ掴んで帰る

わたしの声

中村 恵*鳥取

エルサの色のスカートにある小さき穴広げてしまふ姪は七歳ん、と言ひコップつきだす七歳に察しが悪い大人のわたし

遊びつつ食べて遊んでまた食べて七歳の時間ちようちよの時間おしいるのとびら、おなべのふた、ちちが坐るトイレの戸を開ける姪

部屋見せてとせがんだ姪にダメと言うわたしの声があまりに低い

猛暑日なれば

釘貫英也 広島

「父の日」を三日遅れて娘より大吟醸の日本酒届く

エアコンのスイッチ初めて入れてみる一人で過ごす昼の間に草刈り機の音も聞こえず集落は人影もなし猛暑日なれば

空梅雨に猛暑が続き朝夕に水撒く畑を猪荒らす手造りの銃にこめたる谷疑者の恨みの底の深さ見えざる

鈴木 竹志選

早明浦ダム

山下啓子*香川

夏が来た短パンはいてサンダルでマスクはかくす日焼けの顔をウシガエル我が家を四方包囲して鳴き攻め立てるぬばたまの夜

雨ふらぬ早明浦ダムが気にかかりどうにもならない水位見に行くダム底の役場の屋根が現れて命の水のあやうさ見える

水やりに米のとき汁ためておきひしゃくでかける夕風の庭

雲仙の峰

垣野幸一*長崎

雲仙の峰のなだりはゆるやかに天草灘へ延びのびて落つ

喘ぎつつ展望台に近づくに崖にきわだつ木苺の花

自宅まで二百段あると唄言い石段下で籠を手に提ぐ

海みゆる草生のうえに寝転びて見る佳き夢をさらいゆく風

あい対う医師の机に額入りのメジロの写真置かれていたり

期限切れ

村上京子*長崎

生と死を分ける瞬間繰り返し見せられていて見てもしまいおり
意図しない付度もあり気づかない逆恨み受くりダーなれば
不意に来る幸福の手紙のようなもの宗教の名で不安を煽る
黙々といつもの愚痴は団子に丸め鬱憤晴らして胡瓜を叩く
フィットネス行けない言い訳並び立てチケット八枚期限が切れる

驟雨

新屋希子熊本

ゆつくりと目礼をして去りしひとの夜半のメールに退職を知る
娘らのおしやべりのやうに咲き継げり「星あつめ」といふ紫陽花の花
天井の繭をつづけば透きとほる子蜘蛛の雨が顔くすぐりき



松尾 祥子選

「その二集」特選

受 験 成 田 裕 子*青森

狙い定めマークシートを塗りつぶすこの世生き抜く戦いとして
自己採点終えて自分の存在が行方不明になる試験あと

物忌みの巫女のやうなり部屋にこもり浅田次郎の小説を読む
悲しみは驟雨のやうに吾に降るひとりぼちの社員食堂

老い五人

竹之内麗子 鹿見鳥

老い五人一坪花壇に苗を植うアングロニアとふ珍種も添へて
草に負け軟膏塗りし赤ら顔マスクで覆ひ歌会に来ぬ

気晴らしに赤ブラウスに着替ふれば「鹿見鳥行きか」と夫が尋ぬる
講座名「健康づくり」に加はれば計測器具見て身が引き締まる
九歳も若き数値に小躍りす「ながら体操」の効果と思ひ

特 攻 兵

初音左近 鹿見鳥

竹皮に包みて茹でし芋団子幼き頃の母を思ひぬ
草むらに黄花コスモスぼつぼつと特攻花と呼ばれし花よ
南洋を目指し飛び立つ特攻兵その手に黄花コスモス抱き
「行つてきます」覚悟を決めし特攻兵開聞岳へ花を放りぬ
人の名は知らねど犬の名呼び合ひて交はず挨拶散歩は楽し

息詰めて見知らぬ敵に立ち向かう受験という名のサバイバルにて
試験という戦い終えて以前とは違う自分になっている夏
マーカーを四本を潰し問題を解いたこの夏きつと永遠

40 度 越 え

斎藤洋子 群馬馬

40度越えの猛暑日伊勢崎が全国ニュースになりておどろく

マスクとればいと美人なり年の頃同じくらゐのパートの仲間娘との森の中のランチタイム笑ひ声さへ旋律になる

リビングで吾子と一緒に勉強す漢字、旧かな教へてもらひ十八の青年パーマかけきたりイケメンの子がラッパになる

かににさされた

谷川 恵 埼玉

ブロッコリー炒めるたびに思ひだす音位転換常連語句たち

(ぶっころり)(とうもろこし)は無邪気ゆゑ不穏な空気を際立たせをり夏の夜(か)ににさされた子を思ひ蟹を思ひてキンカンを塗る

(介護度3)から一年あまり父からの朝顔成長記録が届く

パスポートの更新切れて免許証持たぬわたしは誰なのだらう

常夏の夏

清水 美里*東京

好きなのは常夏の夏一年中夏を継続する頼もしさ

生活が下手くそである一枚の布団に家族三人で寝て

速報に添える故人のプロフィールいつから用意されているのか

喋れない子へのアテレコ全部嫌なわけじゃないけど「あたち」はキライ

神様がいなくても来る日曜のサウナは礼拝堂の静けさ

東京ヤクルト

宮 梓 一*東京

鳴り物はなくドラムだけ鳴り響く今日5回目の東京音頭

こっそりとマスクの内で口ずさむ東京ヤクルト東京ヤクルト

182個目の白い綺羅星がドームの天に灯る 乾杯

20番ゲートの前で待ち合わせセークスファンの年上の人

ごはんでもお茶でもなくて球場で出会うあなたにドキドキしてる

木畑 紀子選

大ごっこお

長谷川 綾 子*新潟

日の暮れてバナナのような細い月藍色の空にくつきり浮かぶ

朝焼けの山にて採れた姫竹の味噌汁これぞ夜の大大ごっこ

大輪の白菊を絵に描きたくて胡粉と膠を一心にこねる

山寺の石段を踏み踏みながら芭蕉を想った若き日の我

雨あがり雫は蜘蛛の巣にとまり真珠のごとき輝き放つ

六月の熱波

小森 鈴子 岐阜

十五年つくりつづけて今日気づくキュウリの花のこのあでやかさ

豊かなる水をたたふる星なれど未来あやふし六月の熱波

畑より命が大事と子に言はれ早目に帰る真夏日の朝

空襲に会ひたる地蔵は黒ずみて目鼻の形わづかにのこす

カラス避けの藁のいくつか除けられて収穫まちかの西瓜きえたり

純白の花

須原 泉*静岡

梅雨晴れの庭にすずめが遊んでるただそれだけで心ほぐれて

夕空に音なく光る飛行機の旅ゆく人にエールを送る

純白の花数えれば六、七十香りかぐわしくちなしの花

近頃はテレビを見なくなっただけどカルガモ親子の引越しは見る

少年は喪服の吾に席をゆずりすぐ降りるからと小さく言えり

母をつつむ

中村 泰子*京都

鮭焼いて花柄タオルで冷めぬようふわっと包んで母へ届けぬ

病棟のエレベーターが閉まるとき戯けてバレエのお辞儀する母
手でそつと柩の中の母をつつむ冷たい頬も冷たい指も

「ありがとう」そのひと言は言えぬままあんなにいつもそばにいたのに
解約す母と子の会話聴いていた母の大事なピンクの携帯

似たものどうし

小野 久美子*兵庫

小型化の家電の中でだんだんと大型になるテレビの画面
取りおきて数多くあるコード類似たものどうしどれがどれだか
わたくしと同じTシャツ着た人が向こうから来るお互い見ぬふり
カットするロールケーキにクリームの中の字の字があらわれました
シユシユシユ新幹線が目の前を超高速で抜ける姫路駅

風間 博夫選

きゆうちやん漬

木村 つや子*奈良

初生りの胡瓜を食べるこのうまさ涼しい風が口に広がる
鳥取の土付きラッキョウ買ってきて甘酢に漬ける梅雨入り間近
梅ジュース、梅酒、梅ジャムわれ作る義兄持ちくれし梅三口ロで
家事終えてあじさい見つつゆつくりと新聞を読む幸福時間
豊作の胡瓜で作るきゆうちやん漬うましと夫の体重増える

三度 豆

浦木 妙子*鳥取

インゲンの小さな種は土を割り五月の空のおおを吸いこむ
さよならは寂しいからという義母にじゃあまたねつと電話を切りぬ

異動する友への寄せ書きまん中に目だけが笑ったマスクの似顔絵
眠られず何度も羊を数えるに跳ねるばかりでもう朝の四時
ビー玉が陽に乱反射する夏の朝一度目の三度豆植う

まるい火鉢

植田 静香*香川

雨傘を杖にして長寿大学の同窓会に来たりなつかし
早苗田に映りし讃岐富士のあり梅雨の晴れ間をかすかに揺れて
さなぶりをよろこび渡る朝の風水面に揺れて空は青空
父母と六人家族の囲みたるまるい火鉢はいま庭のすみ
われの乗る観光バスに手をふつてくれたり出雲の中学生ら

毛はサラサラに

中内 佐登美*高知

大手術終えて十日の夫はまだ点滴だけで食事は出来ず
夫からの「今日からお粥が出るらしい」朝一番の嬉しい電話
久々にシャンプリーしたる愛犬の毛はサラサラに吾汗だくに
フィリピン産バナナも値上げするらしい今のうちにと一房を買う
二分半レンジでチンして出来上がり冷凍品の美味しい赤飯

顔パツク中

石本 洋子 佐賀

採り立ての胡瓜の棘が親指に刺さりて痛し身が引き締まる
高齢者運転免許更新を済ませ署を出て一礼をせり
「あそぼーい」先頭車輛最前席取るわれは五歳に戻る
土曜朝九時ピンポンと鳴りたれど只今わたし顔パツク中
厨への小さき窓より見ゆる空ウクライナまで届けこの青